太宰治『斜陽』論
――かず子の「道徳革命」と上原への手紙――

黒田翔大
（日本文化学講座/博士研究員）

1.はじめに

『斜陽』は太宰治の作品において最も有名なものの一つであり、「よくもわるくも戦後において太宰治の名を不動たらしめた作品」[1]である。しかし、研究動向に目を向けると、作家太宰と関連付けるものが多く、「「斜陽」を純粋に作品として論じた研究は存外少ない」[2]というのが現状であろう。作家のほかにも、『斜陽日記』や華族という階級の問題[3]などのように、『斜陽』は作品の外部による問題に注意が向き過ぎ、外部によってテクストが規定されてしまっている感を否めない。そのため、「既成道徳をひっくり返し」「道徳的価値を転換させるすさまじいたたかいを開始する」というように[4]、太宰と『斜陽』のかず子を重ねるような見方が多くなる。しかし、作品自体に目を向けると、かず子の「「革命」の目標は、欲望の解放ではなく愛情の解放である」[5]ことが伺える。

そのため、より作品の内部に目を向けることによって、テクストにおける「道徳革命」に関する考察を行う余地は十分に残されていると考える。本稿では、手紙というメディアに焦点を当てることにする。かず子の上原への手紙を分析することによって、上原の認識に対する変化を考察する。それによって、かず子の「道徳革命」に対して、手紙がどのような影響を与えているのかの一端を明らかにすることを目的とする。

2.手紙によるコミュニケーション――対面との差異

本稿では、かず子の上原への手紙の分析を中心に行うため、手紙によるコミュニケーションとはどのようなものであるのかを対面との比較から確認する。

まず、対面でのコミュニケーションについてみていく。アーヴィング・ゴッフマンはコミュニケーションにおいて伝達される情報を「言語的メッセージ」と「表出的メッセージ」と

---

[1] 伴悦「斜陽論」(文学批評の会(編)『批評と研究 太宰治』芳賀書店、1972 年)、p. 307。
[2] 加藤里奈子「太宰治「斜陽」――「読まれ方」の歴史を追って――」『相模国文』第 25 号 1998 年、3 月、p. 117。
[3] 「華族の没落が世間を賑わせたのは、「斜陽」が執筆された時期ではなく太宰の死後であり、「斜陽」の構想から連載時においては常に皇族の臣籍降下が取りざたされていた。」(服部このみ「太宰治「斜陽」についての一考察――上流階級に関する報道との関連性――」(『金城学院大学大学院文学研究科論集』18 号、2012 年)、p. 61)、「太宰が「斜陽において主人公一家を華族階級に設定したのは、皇族の臣籍降下に影響を受け、「ほとんど皇族に近いくらいの華族」の物語を描くためであった。」(服部このみ「太宰治「斜陽」論――階級設定の曖昧さについて――」『金城日本語日本文化』88 号、2012 年 3 月、p.41)。
[4] 奥野健男「太宰治 人と文学」(太宰治『斜陽』新潮文庫、2013 年改版)、p. 226。
[5] 菊田義孝『人間脱出―太宰治論』彌生書房、1979 年、p. 212。

に分けている。

> 人間は情報を伝達する時、社会的に確立した言語手段(すなわち話しことば)、あるいはその代用となる文字や図や身振りなどの手段を使用する。これは、受け手にメッセージを伝える送り手から見た形態である。しかし、われわれは自己に関する情報を表出的に伝達することもある。この場合には、情報は偶発的に、あるいは何気なく、または意味あり気に伝達され、受け手はそれをひろうという形になる。言語的メッセージは、あらゆることがらに「関連」するが、送り手自身のことについては別として、一般に、情報の送り手と情報の内容とは必然的な関連はない。表出的メッセージは、当然のことながら、その伝達媒体となる人間の身体に「関連」する。人間の身体には伝達媒体の働きが本来そなわっているからである。[6]

対面状況でのコミュニケーションは、表情や身振りや相手との距離[7]といった非言語的な要素[8]が多く占められている。言語的メッセージ以外にも意図的でない表出的メッセージも相手に伝達しているのである。

それでは、対面状況と比較して、手紙の場合はどうなるのだろうか。メイロウィッツはメディアは「表出的手がかりの有効なフィルター」[9]として機能することを指摘している。これを手紙というメディアに援用すると、手紙は文字に関する要素以外の表出的メッセージを遮断するフィルター的装置として機能することになる。

このように、対面と手紙では伝達される表出的メッセージにおいて差異がある。手紙においては、相手に伝達される表出的メッセージが限定され、また、相手からの応答を受けることなく情報を伝達する。『斜陽』においては、かず子の上原宛ての手紙は返事がなく一方向的であり、かず子は上原の応答を受けることなく手紙の内容を書いている。これを踏まえて『斜陽』の作品分析を行っていく。

3.かず子の上原に対する認識と「道徳革命」の関係性

かず子が「道徳革命」のために「戦闘、開始」をするのは六節からである。以後、この「戦闘、開始」という語句が登場するのは 3 回であり、上原と 6 年ぶりの再会を果たすまでの間である。これは、かず子の「戦闘、開始」という最初に抱いていた考えが再会した段階にお

---

[6] アーヴィング・ゴッフマン『集まりの構造 新しい日常行動論を求めて』誠信書房、1980 年、p. 15。
[7] ホールはコミュニケーションにおいて、相手との距離と話す内容の関係性を指摘している(エドワード・ホール『かくれた次元』みすず書房、1970 年)。
[8] 「あるメッセージを伝えるさいには、私たちはその信号が受け取られているか、理解されているかを知るために、相手を見守る。そのさい相手からの反応は、うなずき、目の動き、顔の表情の微妙な変化など、ことば以外の形で返ってくることが多い。このような手がかりが、その後の両者のコミュニケーションの流れを調整してゆくことになるのである。」(マジョリー・F・ヴァーガス『非言語コミュニケーション』新潮選書、1987 年、p. 18)。
[9] ジョシュア・メイロウィッツ『場所感の喪失――電子メディアが社会的行動に及ぼす影響――』上巻、新曜社、2003 年、p. 212。

いて既に崩れ去っていることを示している。

それでは、かず子が「戦闘、開始」をした時とその後の状況はどのように変化し、それに伴い「道徳革命」にどのような連関があるのだろうか。かず子の上原に対する認識の変化を順に追って確認していく。

まず、かず子が上原と初めて対面する場面である。

> 私たちは、地下室の暗い階段をのぼって行った。一歩さきにのぼっていく上原さんが、階段の中頃で、くるりとこちら向きになり、素早く私にキスをした。私は唇を固く閉じたまま、それを受けた。(「三」、p. 91)[10]

かず子は上原と初めて会った際にキスを受ける。そして、「べつに何も、上原さんをすきでなかったのに、それでも、その時から私に、あの「ひめごと」が出来てしまったのだ」というように、上原が特別な存在として認識されるようになっていく。

その後、かず子は上原と再開するまでに 3 通の手紙を送っている。手紙というのは対面の状況と異なり、その場で相手の反応を受けながら話を展開していくのではない。相手の応答を予測しながら話を進めていくことになる。つまり、手紙を書くという行為によって、かず子は上原に関して常に推測や想像で補うことになっていくのである。

1 通目の手紙は次のようにある。

> M・Cには、あなたと同じ様に、おくさまもお子さまもございます。また、私より、もっと綺麗で若い、女のお友達もあるようです。けれども私は、M・Cのところへ行くより他に、私の生きる途が無い気持なのです。M・C の奥さまとは、私はまだ逢った事がありませんけれども、とても優しくてよいお方のようでございます。(「四」、p. 98)

かず子は M・C というイニシャルを用いているが、上原のことを指しているのは明白である。しかし、上原を M・C と記号化することによって虚構化しているのである。

2 通目の手紙は次のようにある。

> いまふっと思った事でございますが、あなたは、小説はずいぶん恋の冒険みたいな事をお書きになり、世間からもひどい悪漢のように噂をされていながら、本当は、常識家なんでしょう。(「四」、p. 109)

かず子は上原と直接会うことはないので、世間の噂から上原についての認識を得ている。そのような状況で、上原に手紙を書くことになるので、上原の虚構化がさらに進んでいく。

3 通目の手紙は次のようにある。

---

[10] 本文引用は、太宰治『斜陽』(新潮文庫、2013 年改版)による。以下、節と頁数を本文末尾に記載する。

私、不良が好きなの。それも、札つきの不良が、すきなの。そうして私も、札つきの不良になりたいの。そうするよりほかに、私の生きかたが、無いような気がするの。あなたは、日本で一ばんの、札つきの不良でしょう。そうしてこのごろはまた、たくさんのひとが、あなたを、きたならしい、けがらわしい、と言って、ひどく憎んで攻撃しているとか、弟から聞いて、いよいよあなたを好きになりました。(「四」、p. 114)

かず子は「弟から聞いて、いよいよあなたを好きになりました」というように、直治から上原の情報を得ている。かず子は上原と会うことなしに、周囲から上原の情報を得ている。その情報をもとに、上原の反応を予測しながら手紙を書くことになる。「上原からの返事がないため、その気持ちが全く分からないかず子は、自分の手紙を反省・分析し、同時にその手紙に対する上原の可能な限りの解釈を想定しながら書き進めるしかない」[11]のである。そのため、かず子の上原に対する認識には現実と大きな差異が生まれてしまうのである。

そのような状況で、かず子が上原と 6 年ぶりの再会を果たすのは次の場面である。

これが、あの、私の虹、M・C、私の生き甲斐の、あのひとであろうか。六年。蓬髪は昔のままだけれども哀れに赤茶けて薄くなっており、顔は黄色くむくんで、眼のふちが赤くただれて、前歯が抜け落ち、絶えず口をもぐもぐさせて、一匹の老猿が背中を丸くして部屋の片隅に坐っている感じであった。(「六」、p. 162)

かず子は自身の抱いていた上原のイメージと現実が乖離していることに失望感を抱く。かず子の「上原」は虚構の産物であり、想像上にしか存在していない[12]。そのため、上原との「かなしい、かなしい恋の成就」になってしまうのである。このように、「道徳革命」のために「戦闘、開始」したかず子であったが、前提として想定されていた上原は虚構に過ぎなかったのである。

そして、「革命」という語句が登場するのは五節からであるが、上原との再会以降では最後の八節におけるかず子の上原への手紙のみである。「道徳革命」はかず子の虚構化した上原を前提とした概念であるため、「上原」が存在しない以上「道徳革命」はあり得ない。だが、再び「上原」を手紙の中で虚構化することによって「道徳革命」は生き延びることが可能になるのである。

---

[11] 孫才喜「太宰治『斜陽』論――かず子と「蛇」をめぐって」『日本研究』19 号、1996 年 6 月、89 頁。

[12] これに関して中村三春は次のように述べている。「不可抗力の到来物としての側面を除けば、かず子の「恋」なるものは、上原という実態とはほとんどか全く無縁である。「おしかけ愛人」という上原への最初の手紙の言葉は、かず子の幻想のあり方を如実に示している。変奏される呼称「M・C」において問題なのは「C」ではなく「M」(マイ)であって、これは上原がどこまでもかず子の主観が仮構した対象に過ぎないことを示している。」(中村三春「「斜陽」のデカダンスと〝革命〟――属領化するレトリック」『国文学 解釈と鑑賞』1996 年 6 月、p. 99)。

4.おわりに

本稿では、手紙に注目し、『斜陽』の作品分析を行った。

『斜陽』は「道徳革命」が重要な問題であると従来から多く取りあげられてきた。この「道徳革命」は「上原」の存在が前提とされているが、かず子の上原に対する認識は一定ではない。かず子は手紙を書くという行為によって、上原を虚構化していくことになる。そして、「上原」というかず子が初めに抱いていた「道徳革命」の前提が崩れた以上、「道徳革命」もその影響を受けざるを得ないのである。

しかし、「道徳革命」が消滅してしまうわけではない。再び虚構化された上原に対する認識を保持することにより、「道徳革命」は消滅を免れる。そして、当初の目的である上原の子どもを妊娠するということを達成し、それによって「道徳革命」を一定程度成し遂げたという思いを抱くことが可能となっているのである。

以上のように、「道徳革命」は何ら自明性を持つものではなく、不安定な土台をもとに成立している概念である。しかし、かず子は「書く」という行為によって自身に都合の良い空間を構築する。メディアには「オルターナティブな空間における自己の再生への期待」[13]があるからである。手紙というメディアが『斜陽』における「道徳革命」をかず子にとって肯定的なものとして捉えることに寄与しているのである。

[13] 加藤春明『自己メディアの社会学』リベルタ出版、2012 年、p. 20。